

ツロの忘れられた七十年

Jeff Pippenger

2023-08-12

ツロの忘れられた七十年

すべての預言者は世の終わりを指し示す。

昔の預言者たちはそれぞれ、自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちのために語った。したがって、彼らの預言は今も私たちに有効である。『これらのことは、彼らの身に起こったのは、私たちの模範とするためであり、また、それらは、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書かれている。』第一コリント 10:11。『彼らは自分たちのためではなく、私たちのためにこれらのことに仕えた。それらは、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々によって、今あなたがたに告げ知らされたのであり、このことを御使いたちも見たいと願っている。』第一ペテロ 1:12. . . .

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

聖書のすべての書は、ヨハネの黙示録で完結する。

「『黙示録』において、聖書のすべての書は出会い、完結する。」『使徒行伝』585頁

地球に住む人々への最後の警告のメッセージは、黙示録18章に示されている。

これらのことの後、私は、天から降りてくるもう一人の天使を見た。その天使は大いなる権威を帯び、その栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔たちの住みか、あらゆる汚れた霊の巢窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富を得たからである。」黙示録 18:1-3

「大いなるバビロン」という語はローマ・カトリック教会を表しており、イザヤ書二十三章では「大いなるバビロン」はツロとして表されている。

ツロについての託宣。タルシシュの船よ、泣き叫べ。家もなく、入る者もないほどに荒れ果てたからだ。このことはキッテムの地から彼らに知らされた。島の住民よ、静まれ。海を渡るシドンの商人たちがあなたがたを潤してきたのだ。大いなる水のほとりでは、シホルの種、すなわち川の収穫が彼女の収入であり、彼女は諸国の市場である。シドンよ、恥じよ。海、すなわち海のとりでが語って言う。「私は産みの苦しみをせず、子を産まず、若者を育てず、おとめを育て上げない。」エジプトに関する報せのときのように、ツロに関する報せにも彼らは激しく痛む。タルシシュへ渡れ。島の住民よ、泣き叫べ。これはあなたがたの歡喜の都なのか、その古さは太古にさかのぼる都なの

に、彼女自身の足が彼女を遠くへ運び、寄留させる。冠の都ツロ、その商人は君たち、その仲買人は地の尊ばれる者たちであるが、そのツロに対して誰がこの計らいをしたのか。万軍の主がそれを定められた。すべての栄光の誇りを汚し、地のすべての尊ばれる者を卑しめるためである。タルシシュの娘よ、川のようにあなたの地を行き巡れ。もはや力はない。彼は海の上に手を伸ばし、もろもろの王国を震わせた。主は商いの都に対して命令を与え、その要塞を滅ぼすようにされた。彼は言われた。「虐げられた処女、シドンの娘よ、もう喜ぶな。立ち上がり、キッテムへ渡れ。そこでもあなたは安息を得ない。」見よ、カルデヤ人の地を。これは、アッシリア人が荒野に住む者のためにそれを建てるまでは存在しなかった民である。彼らはそのやぐらを立て、その宮殿を築き上げたが、彼はそれを荒廃に帰した。タルシシュの船よ、泣き叫べ。あなたがたの力は荒れ果てたからだ。その日には、ツロは一人の王の年月に従って七十年のあいだ忘れられる。七十年の終わりに、ツロは遊女のように歌う。忘れられた遊女よ、琴を取り、町を巡れ。美しい旋律を奏で、多くの歌を歌え。あなたが思い出されるために。七十年の終わりの後、主はツロを顧みられ、彼女はその稼ぎに戻り、地の表の全世界のもろもろの王国と姦淫を行う。彼女の商いとその賃金は主への聖なるものとなる。それは蓄えられもせず、積み立てられもしない。彼女の商いは、主のみ前に住む者たちのためにあり、十分に食べるため、また長持ちする衣服のためである。イザヤ書 23:1-18

シスター・ホワイトは次のように書いている。「旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今も、繰り返されている。」

イザヤ書二十三章は、国連、教皇権、アメリカ合衆国、そしてイスラム教の預言的關係を扱っている。これらの真理を認識するためには、この章のいくつかの象徴を靈感によって定義しなければならない。象徴がいったん定義されれば、出来事の順序はかなり明瞭になる。定義すべきこの章の象徴は次のとおりである：

託宣、ツロ、娼婦、アッシリア人、カルデヤ人の地、塔と宮殿、タルシシュ、シホルの穀物、キッテムの地、シドン、商人の都、エジプトの知らせとツロの知らせ、嘆き叫び、娘、七十年、ひとりの王の時代、忘却、そして想起

第1節の「burden」という語は、ツロの王国に対する滅びの預言を指している。

重荷：H4853-H5375 に由来；重荷；特には貢納、または（抽象的に）運搬（行為）；比喩的には発言、主として破滅の宣告、特に歌；心、願望：－
重荷、運び去る、預言、×彼らは定める、歌、貢納。

ツロの重荷は、ローマ・カトリック教会に対する最終的な審判が示されている聖書の多くの箇所の一つである。「重荷」とは、用法と定義において予言であり、主として破滅の予言である。イザヤ書には「重荷」が十一あり、またこの語は肩に担う重荷を表す意味で八回用いられている。「重荷」が破滅の予言として示されている十一箇所は、イザヤ13:1、15:1、17:1、19:1、21:1、11、13、22:1、30:6、そしてもちろんツロの重荷が見いだされる第二十三章である。終わりの時代にどの勢力が表されているのかを見極めるために、イザヤの破滅の予言をすべて並べて考察することには価値がある。十一の破滅の予言を一度に取り上げるのは難しいので、第二十三章の文脈を整えるために、それぞれ

の破滅の予言の簡単な定義を示すことにする。

第十三章におけるバビロンに対する滅びの預言は、世の終わりにおける現代のバビロンであり、それは『ヨハネの黙示録』第十七章にも描かれているローマの淫婦である。

そして、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語って言った。「ここへ来なさい。多くの水の上に座している大淫婦に対する裁きをあなたに示そう。地の王たちは彼女と淫行を行い、地に住む者たちは彼女の淫行のぶどう酒に酔いしれたのだ。」それから彼は、霊において私を荒野へ連れて行った。すると、私は、神を冒瀆する名で満ち、七つの頭と十の角を持つ緋色の獣の上に座している一人の女を見た。その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で飾られ、手には金の杯を持っており、その中では彼女の淫行の汚れと忌むべきもので満ちていた。彼女の額には、こう書かれた名があった—「奥義、大バビロン、地の淫婦たちと忌むべきものの母」。黙示録 17:1-5.

少し脇道にそれたい。ツロに関する預言の研究の目的は、最終的にはアメリカ合衆国の預言的歴史をセブンスデー・アドベンチスト教会のそれと整合させることにある。私たちは、アメリカ合衆国の政府が黙示録13章の小羊に似た獣の一つの角であり、暗黒時代から出てきたプロテスタントがもう一つの角であることを示す。プロテスタントの角は、米国のプロテスタントが第一の天使のメッセージを拒んだ時点で、ミラー派アドベンチズムとなった。これを踏まえて、プロテスタントの角の歴史と共和主義の角の歴史が互いに並行して進み、並行する預言的特性を備えていることを示す。そもそも両者は同じ獣の上にあり、両方の角が互いに同時代であることを表しているからである。私は、アメリカ合衆国における教会と国家の角のこの並行関係の一例を示そう。彼らはそれぞれのやり方で「忘れる」。

イザヤ書23章は、教皇権が七十年間忘れ去られるという預言的な時点を示しており、その象徴的な七十年のあいだに、人々は教皇制のことも、なぜ暗黒時代が暗黒時代と呼ばれるのかという理由も忘れてしまう。プロテスタントの角がカトリック教会から分離したときの標語は「聖書、そして聖書のみ」であった。彼らは、聖書が教皇制の正体を私たちに知らせていることを忘れてしまった。彼らに委ねられ、なおかつ自分たちこそがその擁護の旗手だと公言していた神聖な文書に込められているメッセージを、彼らは忘れてしまった。

言葉の理解に混乱し、反キリストの意味を見ることができない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。今や、私たちが世と同化する余裕はない。ダニエルは自分の分と自分の場所に立っている。ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。両者は互いに解き明かし合う。これらは、誰もが理解すべき真理を世界に与える。これらの預言は世において証しとなるべきものである。終わりのこの時代にそれらが成就することによって、それら自体が自らを説明することになる。クレス・コレクション、105.

同様に、米国政府を象徴する共和制の角は国民によって、国民のためのものとなるはずだったが、米国の市民もまた、自分たちに託された聖なる文書を忘れてしまった。その聖なる文書とはアメリカ合衆国憲法であり、国民のために設計された政府のモットーは政

教分離であった。彼らは、自分たちに託され、また自分たちがその擁護者であると公言してきた憲法のメッセージを忘れてしまった。

そして忘れてはならないのは、ローマは決して変わらないことを誇りとしているということである。グレゴリウス7世とインノケンティウス3世の原則は、今もなおローマ・カトリック教会の原則である。もし力さえあれば、ローマは過去の諸世紀と同じ勢いで、それらを今なお実行に移すだろう。プロテスタントは、日曜日を高揚させる取り組みにおいてローマの援助を受け入れようと提案するとき、自分たちが何をしているのかをほとんど理解していない。彼らが自らの目的の達成に余念がない間に、ローマは自らの権勢を再興し、失われた覇権を回復しようと狙っている。ひとたび合衆国において、教会が国家の権力を用いる、あるいはそれを支配することができるという原則、宗教的遵守が世俗の法によって強制されうるという原則、要するに教会と国家の権威が良心を支配するものとされるという原則が確立されるなら、この国におけるローマの勝利は確実となる。

神の言葉は差し迫った危険を警告してきた。この警告を顧みなければ、プロテスタント世界は、罠から逃れるには遅すぎる時になってはじめて、ローマの真の目的が何であるかを知ることになるだろう。ローマは静かに権勢を拡大している。ローマの教義は、立法の場においても、諸教会においても、そして人々の心の中においても、その影響力を及ぼしている。ローマは、秘かな奥まった場所に、かつての迫害が繰り返されることになる、その高く巨大な建造物を築き上げている。ローマは、人に悟られぬようひそかに、時が来て打って出るために自らの目的を進められるよう、その勢力を強化している。ローマが求めるのは有利な地歩だけであり、それはすでにローマに与えられつつある。私たちは間もなく、ローマ的要素の目的が何であるかを目にし、そして身をもって感じることになる。神の言葉を信じ、これに従う者はだれであれ、そのために非難と迫害を被ることになる。『大いなる争い』581ページ。

1950年以前に出版されたどんな辞書でも見つけて、黙示録十七章の「緋色の女」またはその類似表現を引いてみれば、そうした1950年以前の辞書はすべて、ローマ・カトリック教会こそが黙示録十七章の淫婦であると記している。アメリカ合衆国は黙示録十三章の二本の角をもつ地から上って来る獣-プロテスタンティズムの角であれ共和主義の角であれ、その過去を忘れている。これら二つの制度は、教皇制の宗教的専制と、彼女を支持した王たち-聖書の言葉でいえば「彼女と姦淫した」王たち-の政治的専制に対する抗議から生まれた。イザヤ書二十三章を取り上げる前に、イザヤが「滅びの託宣」と特定しているほかの十箇所の概観を簡単に示す。というのも、十一の「重荷」はすべてそのことを指しているからである。

イザヤ書13章は、「終わりの日々」におけるバビロンに関する託宣である。終わりの日々には、バビロンはカトリック教会に支配され指導されるが、黙示録16章で世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力から成っている。現代のバビロンに対する13章の破滅の預言には三つの勢力が示されている。すなわち、バビロン、ルシファー、アッシリアであり、それぞれ獣（アッシリア）、竜（ルシファー）、偽預言者（バビロン）を表す。アッシリアとバビロンは、神が古代イスラエルを罰するために用いた二つの荒廃させる勢力であり、まずアッシリアが来て北の十部族を捕囚とし、その後バビロンがユダの南の二部族を連れ去った。

イスラエルは散らされた羊である。獅子たちが彼を追い散らした。まずアッシリアの王が彼を食い尽くし、最後にこのバビロンの王ネブカドネザルが彼の骨を砕いた。それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。見よ、わたしはアッシリアの王を罰したように、バビロンの王とその地を罰する。エレミヤ書 50:17、18。

まずアッシリアが北イスラエルの十部族を捕囚にし、その後にバビロンがユダの二部族を捕囚にした。これら二つの捕囚は、レビ記26章の「七つの時」の成就であった。レビ記の「七つの時」は、ウィリアム・ミラーが発見した最初の「時の預言」であり、アッシリアが北の部族を捕らえたとき、それが二千五百二十年にわたって続く離散の始まりであったことを示している。その期間は紀元前723年の彼らの捕囚に始まり、1798年の「終わりの時」に終わった。南の二部族は紀元前677年にバビロンに連れ去られ、これによってユダに対する「七つの時」が始まり、それはダニエル書八章十四節の2300年の預言と同じ時点、1844年10月22日に終わった。アッシリアとバビロンは、神の民の反逆に対する懲罰という同じ目的を果たしたが、その懲罰はまずアッシリアによって、次にバビロンによって行われた。

第十三章における三つの勢力の預言的關係において、バビロンはアッシリアの写しである。というのも、バビロンは後に現れたが、神の民に対して同じ働きをしたからである。

第十五章では、モアブに対する託宣はプロテスタント諸教会に対するものだ。

「モアブについてのこの記述は、モアブのようになってしまった諸教会を表している。彼らは忠実な見張りとして自分の持ち場に立ってこなかった。彼らは、神のみこころを行うために神から与えられた能力を発揮し、暗闇の勢力を押し退け、この世で真理と義を進めるために神が彼らに与えたあらゆる力を用いることによって、天の知的存在と協力してこなかった。彼らは真理の知識を持ってはいるが、知っていることを実行してこなかった。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第4巻、1159頁。

墮落したプロテスタント教会とは、第二の天使のメッセージのときに他のプロテスタント諸派が逃げ去った際にも主とともに歩み続けた教会である。モアブはアドベンチズム、墮落したプロテスタントの角である。

第十七章はダマスコについて述べており、それは奪われる都市とされている。都市は国の象徴であり、「終わりの日」に奪われる国はアメリカ合衆国である。

第十九章は、国際連合と全世界を象徴するエジプトに対する滅びの預言である。

第二十一章の次の三つの滅びの預言は、南の恐るべき砂漠の地、ドマ、アラビアに対するものです。これら三つの滅びの預言は、黙示録8章13節の三つのわざわいと一致して、イスラム教を指し示しています。

第22章の破滅を告げる預言は、日曜法の時にラオデキアのアドベンチストがフィラデルフィアのアドベンチストから分離されることを描写している。

そして第三十章では、南の獣たちに関する託宣がある。これはラオデキアのアドベンチストの反逆の第二の例証である。イザヤのすべての託宣をまとめて見ると、「終わりの日」におけるあらゆる預言上の登場人物が事実上取り上げられている。私は、アメリカ合衆国

が聖書預言の第六の王国として1798年から日曜法に至るまで支配することを示すために、イザヤ二十三章を取り上げている。

「古代の預言者はそれぞれ、自分たちの時代のためよりもむしろ私たちの時代のために語ったので、その預言は私たちに対して有効である」ゆえに、すべての預言的な語りは世の終わりの出来事を指している。この真理に、「聖書のすべての書は黙示録において合流し、終わりを迎える」という事実が加わることで、世の終わりの出来事に関する預言の証言を照らし合わせる際の拠り所として、黙示録が位置づけられる。

ヨハネの黙示録第17章で、私たちは地の王たちと姦淫を犯す大淫婦と彼女の最終的な裁きを見る。

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して言った。「ここへ来なさい。多くの水の上に座している大淫婦に対する裁きを、あなたに示そう。」地の王たちはこの女と淫らなことを行い、地に住む者たちはその淫行のぶどう酒に酔わされた。ヨハネの黙示録 17章1、2節

預言者たちは互いに決して矛盾しない。

そして、預言者の霊は預言者に従う。神は混乱の神ではなく、平和の神である。これは聖徒たちの諸教会すべてにおいても同じである。コリント人への第一の手紙 14:32, 33.

世の終わりには、「多くの水の上に座している大淫婦」に対する「裁き」、すなわち「地の王たちがその女と淫行を行い」、「その淫行のぶどう酒によって地に住む者たちを酔わせた」その大淫婦は、イザヤによって「『一人の王の時日』、すなわち預言的な七十年のあいだ忘れられている『遊女』」として描かれている。七十年が満ちると、ツロは「世界のすべての王国と淫行を行う」。イザヤの遊女はヨハネの大淫婦である。イザヤの遊女とヨハネの淫婦はローマ・カトリック教会を表している。神の言葉において、女は教会の象徴だからである。

妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に従いなさい。夫は妻のかしらであり、キリストが教会のかしらであるようにそうである。キリストはそのからだの救い主である。それゆえ、教会がキリストに従うように、妻たちもすべてのことにおいて自分の夫に従いなさい。夫たちよ、キリストが教会を愛し、そのためにご自身をささげられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。それは、御言葉による水の洗いによってそれを聖別し、清めるためである。しみやしわやその類いのものがなく、聖く傷のない栄光の教会としてご自分の前に立たせるためである。このように、夫も自分のからだのように妻を愛すべきである。妻を愛する者は自分自身を愛しているのだ。自分の身を憎んだ者はだれもいない。むしろ、主が教会に対してそうされるように、それを養い、いたわるのである。私たちはそのからだ、すなわちその肉とその骨に属する肢体だからである。それゆえ、人は父と母を離れ、その妻に結びつき、二人は一体となる。これは大いなる奥義である。私はキリストと教会について語っているのである。しかしながら、あなたがた一人ひとり、自分自身のように自分の妻を愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。エペソ人への手紙 5章22-33節。

使徒パウロは、キリストの教会が預言において女として表されていると指摘している。したがって、預言における女は教会を意味するが、キリストの教会は「聖く、しみのない」ものである。聖くない教会は聖くない女として表され、ゆえにイザヤは淫婦を、ヨハネは娼婦を挙げている。彼らは教皇制を娼婦として描き、神の教会は処女である。

私は、神にかなった嫉妬をもってあなたがたに対して嫉妬しています。というのは、あなたがたを純潔な処女としてキリストにささげるために、私はあなたがたを一人の夫に婚約させたからです。コリント人への第二の手紙 11:2.

神の教会は処女として表されているだけでなく、ただ一人の夫にのみ結ばれている。ツロとヨハネの大淫婦は、地の王たちと姦淫を犯す。カトリック教会は一人ではなく複数の男たちと関係を持つ。ダニエルは、王たちが王国を表すことを教えている。

これがその夢です。私たちはその解き明かしを王の御前で申し上げます。王よ、あなたは諸王の王です。天の神があなたに王国と権威と力と栄光をお与えになったからです。人の子らが住むどこであれ、野の獣も空の鳥も、神はそれらをあなたの手渡し、あなたをそれらすべての上に支配者とされました。あなたがこの金の頭です。あなたの後には、あなたに劣る別の王国が起こり、その後には第三の青銅の王国が起こって、全地を治めるでしょう。第四の王国は鉄のように強くなるでしょう。鉄はすべてを打ち砕き、征服します。鉄がこれらすべてを打ち砕くように、それも粉々に打ち砕き、押しつぶします。ダニエル書 2:36-40.

ダニエル書2章では、聖書の預言における諸王国が明らかにされ、説明されている。ダニエルがネブカドネザルに夢を解き明かす際、彼はネブカドネザルが金の頭であると告げる。金の頭は王を指すが、王は王国を表す。ローマ・カトリック教会は、預言的な七十年の終わりに地のすべての王たちと姦淫を行う大淫婦である。王たちは人間の象徴であり、ツロは汚れた女である。女は教会、淫婦は不浄な教会であり、男は王で、王は王国である。女は教会であり、王は国家である。この二つの存在の不法な関係は、霊的な姦淫を表している。

アメリカ合衆国憲法は、両者の分離の必要性を明記した神聖な文書である。ツロをローマ・カトリック教会と同定する議論はまだ終わっていないものの、この時点で、男女-教会と国家-の象徴性を説明するイザヤ書二十三章の別の象徴を取り上げるのが適切に思われる。

見よ、カルデヤ人の地を。この民は、アッシリア人が荒野に住む者たちのためにそれを築くまでは、存在しなかった。彼らはその塔を建て、その宮殿を築き上げたが、彼はそれを荒廃させた。イザヤ書 23:13.

その聖句では、アッシリヤ人がカルデヤの地を興し、「塔」と「宮殿」を築いた。アッシリヤ人はニムロドの象徴であり、カルデヤ人はバビロンの秘儀宗教の宗教指導者たちを表している。「塔」は教会の象徴である。イエスがぶどう園のたとえを示されたとき、ホワイト姉妹はそのたとえについて次のように述べている。

このたとえで、家の主人は神を、ぶどう園はユダヤ民族を、そして垣根は彼らの保護であった神の律法を表していた。塔は神殿の象徴であった。Desire of Ages, 596.

アッシリア人は、教会（塔）と「宮殿」を建てたカルデア人の地を築いた。「宮殿」は「王」を表し、その「王」は王国を表す。王国はまた都市としても表される。

彼らは言った。「さあ、私たちのために町と、頂が天に届く塔を建てよう。私たちの名を上げよう。そうでないと、私たちは全地に散らされてしまう。」創世記11章4節

アッシリア人が築いた「塔」と「宮殿」は、ニムロデが建てた「町」と「塔」である。

そして彼らの死体は、大いなる都の通りに横たわることになる。その都は靈的にはソドムとエジプトと呼ばれ、そこでは私たちの主も十字架につけられた。ヨハネの黙示録 11:8

靈感は私たちに、黙示録11章の「大いなる都」がフランス革命期のフランス王国を象徴していると教えている。

「その街路で証人たちが殺され、その死体が横たわっている『大いなる都』は、『靈的に』言えばエジプトである。聖書の歴史に登場するすべての国々の中で、エジプトほど生ける神の存在を大胆に否定し、その命令に逆らった国はない。天の権威に対して、エジプトの王ほど公然かつ横暴に反逆を企てた君主はほかにいなかった。主の名によってモーセが彼にこの言葉を伝えたとき、ファラオは高慢にもこう答えた。「エホバとは何者か。イスラエルを去らせよ」というその声に、私が耳を傾けねばならないとは。私はエホバを知らない。さらに私はイスラエルを去らせない。」（出エジプト記5章2節、A. R. V.）これは無神論であり、エジプトによって表される国は、生ける神の求めを同様に否認する声を上げ、不信と反抗の同じ霊をあらわすであろう。『大いなる都』はまた、『靈的に』ソドムにも比されている。ソドムが神の律法を破った墮落は、特に淫乱において顕著であった。そしてこの罪は、この聖句の規定を満たすべき国においても、際立った特質となるはずであった。」

それゆえ、預言者の言葉によれば、1798年の少し前に、聖書に対して戦いを挑むために、悪魔的な起源と性質をもつある勢力が台頭するであろう。そして、このようにして神の二人の証人の証しが沈黙させられるその地では、ファラオの無神論とソドムの放縦が露わになるであろう。

この予言はフランスの歴史において、きわめて正確で著しいかたちで成就した。フランス革命のさなか、1793年に、「文明のうちに生まれ育ち、ヨーロッパでも最も優れた国々の一つを統治する権利を自らに認める人々の議会が、人間の魂が受け入れる最も厳粛な真理を否定し、神への信仰と礼拝を全会一致で放棄することを、世界ははじめて耳にした」-サー・ウォルター・スコット『ナポレオン伝』第1巻第17章。「フランスは、宇宙の創り主に対して国家として公然と反逆の手を挙げたという真正の記録が現存する、世界で唯一の国である。冒瀆者や不信者は、イングランド、ドイツ、スペイン、その他の地に昔から多くおり、今もなおいる。だがフランスは、立法議会の布告によって神は存在しないと宣言し、その宣布を受け入れて、首都の全住民と他地域の圧倒的多数が、男女を問わず、喜びのうちに踊り歌ったという点で、世界史において独自の地位を占める唯一の国家である」-『ブラックウッズ・マガジン』1870年1月。The Great Controversy, 269.

黙示録十一章の「大いなる都」とは、神は存在しないと宣言する「立法議会の布告」を可決したフランスという国家であった。その布告は、ファラオの反逆に代表される無神論の表れであった。大いなる都とは王国、すなわち「国」あるいは「国家」である。黙示録十一章では、フランスはエジプトとソドムという二つの象徴から成っている。

私たちは、次のように教えられている。「これは無神論であり、エジプトに象徴される国もまた、生ける神の要求を同様に否定することを公言し、同様の不信と反抗の精神を現すであろう。『大いなる都』はまた、「霊的に」ソドムにたとえられている。神の律法を破ったソドムの墮落は、とりわけ淫乱において顕著に現れた。」

フランスという大いなる都または国は、象徴的に、国（エジプト）と都市（ソドム）によって表されている。エジプトは「声を上げる」のであり、国家が語ることは教権ではなく政道（国家統治）を表す。黙示録11章に見られる表象は、「エジプトは国家、ソドムは教会」である。

国家の「発言」は、その立法府および司法府の行為である。『The Great Controversy』、442ページ。

黙示録11章で、ヨハネはフランス革命の出来事を預言的象徴で示している。実際の革命は、この章におけるヨハネの予言の正当性を裏づける十分な歴史的証拠を提供した。まずヨハネが予言し、次にフランス革命がその予言を成就した。そしてさらに、予言そのものとその歴史的成就の双方が、世の終わりの出来事-再び腐敗した国家が腐敗した教会と結びつくとき-を指し示し、これと並行している。むろん、その不浄な結託の後には流血の惨事が続く。神の国もまた大いなる都である。

彼は私を霊において大きく高い山に連れて行き、神から、天から下ってくるあの大いなる都、聖なるエルサレムを私に見せた。黙示録 21:10

ここに示されている花婿の来臨は、婚礼の前に起こる。婚礼は、キリストがご自身の御国をお受けになることを表している。王国の首都であり代表である聖なる都、新しいエルサレムは、「花嫁、小羊の妻」と呼ばれる。御使いはヨハネに言った、「ここへ来なさい。私はあなたに花嫁、小羊の妻を見せよう。」預言者は言う、「彼は私を御霊によって連れ去り、神のもとから天から下ってくるあの大いなる都、聖なるエルサレムを私に見せた。」黙示録21:9, 10. 大いなる論争、426.

ニムロドの反逆は、彼が塔と町を建てたことで示されているが、それは、すべての預言者が語った世の終わりにおける政教一致を象徴している。ニムロドの反逆はまた、神の教会と神の国家の双方を支配しようとしたルシファーの反逆の継続でもあった。

なんとおまえは天から落ちたことか、暁の子、ルシファーよ！
国々を弱らせた者よ、なんとおまえは地に切り倒されたことか！ おまえは心の中で言った、『私は天に上ろう。神の星々の上に私の王座を高く据えよう。私はまた、北の果てにある会衆の山に座ろう。私は雲の頂よりも高く上り、いと高き方のようになるう』と。イザヤ書 14:12-14

イザヤは、ルシファーの心の秘めた願いが「いと高き方のようになること」であると明らかにし、彼が二つのまったく異なる座につこうとしていることを指摘している。彼は自

分の「王座を神の星々の上に高く上げ」、また「北の果ての会衆の山に座ろう」と願っている。

玉座は王の権威、すなわち国家の権威の象徴であり、「北の側」は神の教会である。

コラの子らのための歌と詩。主は偉大で、我らの神の都、その聖なる山において大いに賛美される。美しくそびえ、全地の喜びであるシオンの山は、北の方にあり、偉大な王の都である。神はその宮殿において、避け所として知られている。詩篇 48:1-3

エルサレムは「大いなる王の都」であり、それによって神の政治的王座を指し示している。また、エルサレムは「その聖なる山」「北のはて」でもあり、それによって神の宗教的王座を指し示している。初めから、サタンの反逆と戦いは、神の教会と神の国家の双方を支配しようとする彼の野望の文脈の中で描かれている。その後、サタンはニムロデの反逆を主導した。そして、ニムロデがカルデヤ人のために築いたその地は、彼が塔と都市、すなわち教会と国家の双方を築いた場所として描かれている。

それゆえ、イザヤの淫婦とヨハネの大淫婦が地の王たちと姦淫するとき、預言は、預言上の七十年の終わりに、ローマ・カトリック教会と地の王たちとの間に不聖な関係が生じることを示している。

イザヤの預言では、第二十三章において淫婦ツロの裁きが記され、ヨハネは、その同じ裁きを「大いなるバビロン」と呼ばれる緋色の女の象徴によって描写している。同じ淫婦に対する同じ裁きについての第三の証言は次のとおりである。

黙示録17章に出てくる女（バビロン）は、「紫と緋の衣をまとい、金や宝石や真珠で飾られ、その手には忌むべきものと汚れで満ちた金の杯を持ち、…その額には『奥義、大バビロン、淫婦たちの母』という名が記されていた」と描写されている。預言者は言う。「私は、その女が聖徒たちの血とイエスの殉教者たちの血に酔っているのを見た。」さらにバビロンは、「地の王たちを支配している大いなる都」であると宣言されている。黙示録17:4-6、18。幾世紀にもわたりキリスト教世界の君主たちを専制的に支配してきたその権力はローマである。『大争闘』382ページ。

ツロは「終わりの時」におけるローマ・カトリック教会である。その時、教皇権は出て行って地の王たちに向かってその誘惑の歌を歌い、こうして王たちを姦淫の行為へと導くが、これは預言的には教会と国家の結合を意味する。

その日には、ひとりの王の年限にしたがって、ツロは七十年のあいだ忘れられる。七十年の終わりには、ツロは遊女のように歌うであろう。イザヤ書 23:15。

聖書の預言では、王は王国を指すので、預言された王国が七十年間支配している間、ツロは忘れられるだろう。

その日、ツロは一人の王の日数に従って、七十年のあいだ忘れられる。七十年の終わりには、ツロは遊女のように歌う。「琴を取れ、町を巡れ、忘れられた遊女よ。美しく調べを奏で、多くの歌を歌え。そうすれば、おまえは思い出される。」七十年の終わりの後、主はツロを顧みられ、彼女は再びその報酬に立ち返り、地の面の上にある世のすべての王国と姦淫を行う。イザヤ 23:15-17。

預言的な七十年間支配する一つの王国の時代には、ローマ・カトリック教会は忘れ去られる。その七十年の終わりに、教皇権は「甘美な調べを奏で、多くの歌を歌う」。預言的には「歌」は「経験」を表す。

御座の前の水晶の海、すなわち火と交じったかのようなガラスの海—それほどまでに神の栄光に輝くその海の上に—『獣とその像とその刻印とその名の数に勝利した』一群が集められている。彼らはシオンの山で小羊とともに立ち、『神の琴を持ち』、人の中から贖われた十四万四千人である。そして多くの水のとどろきのように、大いなる雷鳴のように、『琴弾きたちがその琴を奏でる声』が聞こえる。彼らは御座の前で『新しい歌』を歌う。その歌は十四万四千人のほか、だれも学ぶことができない。それはモーセと小羊の歌—解放の歌である。その歌を学べるのは十四万四千人だけである。というのも、それは彼らの経験の歌—他のどの群れもかつて持ったことのない経験—だからである。『彼らは小羊がどこへ行かれても従う者たちである。』彼らは地から、生ける者の中から移され、『神と小羊にささげられる初穂』と数えられる。黙示録15章2、3節;14章1-5節。『これらは大いなる患難から出て来た者たちである。』彼らは、国が成って以来かつてなかったような苦難の時を通り、ヤコブの苦難の時の苦悶に耐え、神のさばきが最終的に注ぎ出される間、執り成す者なしに立ち続けた。しかし彼らは救い出された。というのも、彼らは『自分たちの衣を小羊の血で洗い、それを白くした』からである。『彼らの口には偽りが見いだされず』、神の前で『傷のない者』である。『それゆえ、彼らは神の御座の前におり、昼も夜もその宮で神に仕える。御座に座しておられる方が彼らの上に住まわれる。』彼らは、飢饉と疫病で荒廃する地を見、太陽が激しい熱で人々を焼く権威を与えられたのを見、自らも苦難と飢えと渇きを耐え忍んだ。しかし、『彼らはもはや飢えることも、また渇くこともない。太陽も、どんな暑さも、彼らを打つことはない。なぜなら、御座の中央におられる小羊が彼らを牧し、いのちの水の泉へと導き、神が彼らの目からすべての涙をぬぐい取ってくださるからである。』黙示録7章14-17節。『大争闘』648。

「『その宮では、すべての者がその栄光を語る』（詩篇29:9）、そして、贖われた者たちが歌う歌—彼らの経験の歌—は、神の栄光を宣べ伝えるであろう。『全能者なる主なる神よ、あなたのみわざは大いにして驚くべきものです。あなたの道は正しく、真実です。世々の王よ、主よ、だれがあなたを恐れず、あなたの御名をあがめないでしょうか。あなただけが聖なる方だからです。』黙示録15:3、4、R.V.」教育、308。

預言的な七十年の終わりに、教皇権は『甘美な調べを奏で、多くの歌を歌って、』彼女が『思い起こされるように』するだろう。預言的な七十年のあいだ支配する王国の終わりに、ローマ・カトリック教会は、自らの過去の歴史の経験を世界に思い起こさせるだろう。その歴史において彼女は、ヨーロッパの王たちとの関係において道徳的権威として君臨した。その歴史は正当に暗黒時代と呼ばれており、教皇権がヨーロッパの王たちを支配したその歴史といかなる形であれ結びつけられるすべての暗闇は、後に続くあらゆる暗闇を生み出したまさに根源的な行為に帰せられる。その行為とは、教会と国家の結合、すなわちヨーロッパの王たちとカトリック教会の結合であった。聖書的な結婚においては男が女を治めることになっているが、あの歴史において起こった姦淫は、男女関係の真の秩序を逆さまにしたものだった。

七十年の終わりに、教皇制が預言において忘れ去られている期間に世界を支配する、聖書の預言が語る王国が終焉を迎えるとき、大きな危機が起こる。その王国の崩壊によって生じる世界的な危機は、暗黒時代の歴史が示すように、カトリック教会が、同崩壊をもたらした困難な時代を乗り切るには世界はローマ・カトリック教会の道徳的権威に従わなければならないのだと、世界に伝え始めるための道を開く。

王国が終わり、歴史家たちが「暗黒」と呼ぶ彼女の過去の経験の歌を教皇権が歌うとき、では、そのような暗黒の歴史が、どうして教皇権が地の王たちと分かち合い、彼らを彼女と姦淫するよう説得するためのメッセージになりうるのか。大いなる危機にあって、預言的に忘れ去られる以前の彼女の過去の時代の経験（彼女の歌）が、どうして地の王たちに、暗黒の経験を自らの大いなる危機の解決策として受け入れるための論拠を与えるのか。

ローマ・カトリック教を好意的に見ていない人々の中でさえ、その権勢と影響力に危険をほとんど感じていない者が少なからずいる。多くの人々は、中世に蔓延していた知的・道徳的な暗黒が、その教義や迷信、圧制の広がりを助長したのだと主張し、さらに、現代のより高い知性、知識の一般的普及、宗教問題における自由化の進展が、不寛容と専制の復活を許さないのだとも言う。この啓蒙された時代にそのような事態が起こり得るという考えそのものが嘲笑される。知的にも道徳的にも宗教的にも偉大な光がこの世代を照らしているのは事実である。神の聖なる御言葉が開かれ、そのページを通して、天からの光が世界に注がれてきた。しかし、与えられた光が大きければ大きいほど、それを曲げて退ける者の暗闇はいっそう深くなることを忘れてはならない。

祈りをもって聖書を研究するならば、プロテスタントは教皇制の真の性格を知り、それを忌み嫌って遠ざけるようになるであろう。ところが多くの者は自分の賢さに自惚れて、真理へ導かれるためにへりくだって神を求める必要を感じない。自らの啓蒙を誇りながら、彼らは聖書にも神の力にも無知である。彼らは良心の呵責を鎮める何らかの手段を必要としており、できるだけ霊的でなく、しかもへりくだりを最小限にすませるものを求める。彼らが望むのは、神を覚える方法として通用しながら、実は神を忘れさせる方法である。教皇制は、こうした欲求に実によく適合している。これは、ほとんど全世界を包み込む二つの種類の間——自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にありながら救われようとする者——のために備えられている。ここにその力の秘密がある。

大いなる知的暗黒の時代は、教皇制の成功にとって有利であることがすでに示されてきた。やがて、大いなる知的光明の時代もまた、その成功に同様に有利であることが証明されるであろう。過去の時代、人々が神の言葉も真理の知識も持たなかったとき、彼らの目は覆われ、足もとに張り巡らされた網が見えず、何干という人々が絡め取られた。この時代には、人間の思弁のまばゆい輝き——「偽りの名をもつ科学」——に目がくらむ者が多く、彼らはその網を見分けることができず、あたかも目隠しをされたかのようにたやすくその中へ踏み込んでいく。神は、人間の知的能力が造り主からの賜物として尊ばれ、真理と義に仕えるために用いられるようにと意図しておられた。しかし、誇りと野心が抱かれ、人が自分の理論を神の言葉よりも高く掲げるとき、知性は無知よりも大きな害をもたらす。このように、聖書への信仰をむしばむ

今日の偽りの科学は、魅力的な形式をまとった教皇制を受け入れさせるための道備えにおいて、暗黒時代に知識を抑圧することがその権勢拡大への道を開いたのと同じほどの成功を収めるであろう。『大いなる論争』572頁。

ローマ・カトリック教徒は、安息日の変更が自分たちの教会によって行われたことを認め、まさにこの変更を教会の至上権威の証拠として挙げる。彼らは、週の第一日を安息日として守ることによって、プロテスタントは教会が神的な事柄における立法権を有していることを認めているのだと宣言する。ローマ教会は自らの無謬性の主張を放棄しておらず、世界とプロテスタント諸教会がローマ教会の作り出した偽りの安息日を受け入れる一方でエホバの安息日を退けると、彼らは事実上この主張を認めているのである。彼らはこの変更の権威を引き合いに出すかもしれないが、その論法の誤謬は容易に見抜ける。教皇派は、プロテスタントがみずからを欺き、この件の事実に進んで目をつむっていることを見抜くほどに鋭い。日曜制度が支持を得るにつれて、彼は喜び、やがてそれがプロテスタント世界全体をローマの旗の下に置くことになると確信する。

安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし（印）である。第四戒の要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者は、そうすることによって、それを命じている唯一の権威に服従を表明していることになる。獣の刻印とは教皇制の安息日であり、それは神の定めた日に代えて世界に受け入れられてきたものである。

しかし、預言で定められている獣の刻印を受ける時は、まだ来ていない。試練の時も、まだ来ていない。ローマ・カトリック教会も例外ではなく、あらゆる教会に真のクリスチャンがいる。光を受け、第四の戒めに従うべき義務を悟るまでは、だれも罪に定められない。だが、偽りの安息日を強制する布告が発せられ、第三天の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して人々に警告するとき、偽りと真理の間にはっきりと一線が引かれる。その時、なおも背きを続ける者たちは、額か手に獣の刻印を受ける。

私たちは急速な歩みでこの時期に近づきつつある。プロテスタント諸教会が、彼らの先祖がその反対のゆえに最も激しい迫害に耐えた偽りの宗教を支えるため、世俗の権力と結びつくとき、教会と国家の連合した権威によって教皇制の安息日が強制されるであろう。国家的な背教が起こり、それは国家的破滅にしか終わらない。バイブル・トレーニング・スクール、1913年2月2日。

私たちは、章そのものを本格的に扱う前に、特定しようとしている象徴のうち五つにすでに触れてきた。聖書の預言においては、都市は王国を表し、イザヤ書二十三章には、互いに密接に関連しながらも明確に異なる二つの王国がある。第一は「冠を授ける都」、もう一方は「商業の都」である。終わりの時に、竜と獣と偽預言者の三者連合を支配する力は教皇制であり、それが冠を持つ王国である。

最後の危機に近づきつつ、主の器たちの間に調和と一致が存在することは死活的に重要である。世界は嵐と戦争と不和で満ちている。しかし、一つの頭-すなわち教皇権-のもとで、人々は神の証人たちを通して現れる神に敵対するために一致するであろう。この結合は大いなる背教者によって固められる。彼は真理に対する戦いにおいて自分の手先たちを結束させようとする一方で、その擁護者たちを分裂させ、散らそう

と働く。嫉妬、邪推、中傷は、彼によってそそのかされ、不和と分裂を生じさせる。『証言』第7巻、182頁。

冠を持つ王国はツロであり、その名は「岩」を意味する。この章でツロは、キリストを偽って模倣しようとする教皇制を表している。というのも、教皇制は反キリストだからである。反キリストの「anti」という語は「～の代わりに」を意味する。教皇制はあらゆる面でキリストを偽って模倣しようとし、またツロという名は岩を意味する。というのも、教皇制は「永遠の岩」の偽物だからである。

商人は君侯、交易人は地の尊貴な者である冠を授ける都ツロに対して、この計りごとを立てたのは誰か。万軍の主がこれを定められた。すべての栄光の誇りを汚し、地のすべての尊貴な者を卑しめるためである。タルシシの娘よ、川のようにあなたの地を行き巡れ。もはや力はない。彼は海の上に手を伸ばし、諸国を震わせた。主は商業の都に対して命令を下し、その要塞を滅ぼすよう命じた。イザヤ書 23:8-11。

私たちは、「諸王国の揺り動かし」がイスラムを通して神によって成し遂げられることを、多くの証言に基づいて示そうとしている。イスラムは諸国民を怒らせ、諸国を揺り動かすために用いられる力である。この時点で私たちは、主が「地のすべての尊貴な者」を辱めることを定めておられると特定している。彼らとは、その「堅固なとりで」が滅ぼされることになっている「商人」や「交易者」である。「商人の都」と「冠を授ける都」は「天の不興を買って」おり、主は彼らの「堅固なとりで」を滅ぼすことを定められた。それは経済を表している。アメリカ合衆国における日曜法の前に、経済の崩壊が起こる。というのも、日曜法に先立って、アメリカの市民は「神の恩寵と現世の繁栄」への回復を要求しているからである。彼らの主張は、日曜日「厳格に施行」されるまで神の裁きは終わらない、というものである。複数の聖書の証言は、私たちが世界経済の大崩壊の瀬戸際にあることで一致している。その崩壊は日曜法の前に起こる。ちょうど1837年の恐慌が1844年10月22日の前に起こったのと同様である。

そして大いなる欺き手は、人々に、神に仕える者たちこそがこれらの災いの原因だと信じ込ませるだろう。天の不興を買ってきた階級は、神の戒めへの従順が違反者に対する絶えざる譴責となっている人々に、自分たちのあらゆる災難の責めを負わせるだろう。日曜安息日を破ることによって人々は神を怒らせている、この罪のために災厄がもたらされ、それは日曜日の遵守が厳格に施行されるまでやむことはない、そして第四戒の要求を主張して、こうして日曜日への尊崇を打ち壊している者たちは民を悩ます者であり、神の恵みと地上的繁栄への回復を妨げているのだ、と宣言されるだろう。こうして、昔、神の僕に対して突きつけられた非難が、同様にもっともらしい根拠に基づいて繰り返されるのである。「アハブがエリヤを見たとき、アハブは彼に言った、『イスラエルを悩ます者はおまえか。』彼は答えた、『イスラエルを悩ましているのは私ではない。主の戒めをあなたがたが捨て、あなたがバアルに従ったので、あなたとあなたの父の家こそがそうしているのだ。』列王記上18章17、18節。」人々の怒りが虚偽の告発によってかき立てられるとき、彼らは、背信のイスラエルがエリヤに対してとったのと非常に似た態度を、神の使者たちに対してとるようになるだろう。大いなる論争、590。

カルメル山でエリヤがバアルの預言者たちと木立の祭司たちに対峙した出来事は、日曜法を表している。教会へのメッセージは「今日、あなたがたが仕える者を選べ」であった。この歴史が日曜法で繰り返される時、問われるのは「どの日を選ぶのか。あなたが選ぶ日が、あなたが誰に仕えているかを示すからである」である。カルメル山の出来事の前には、3年半に及ぶ深刻な干ばつがあった。日曜法の前には一連の日曜関連法があるが、それらは「厳格には施行されてこなかった」。日曜法に結びつく原則は、国家的背教のあとには国家的破滅が続くということである。その例として、321年にコンスタンティヌスが日曜法を制定し、そのほどなくして黙示録8章の最初の四つのラッパが鳴り、476年までに西ローマを終焉へと向かわせ始めた。コンスタンティヌスの物語が重要なのは、そこに日曜日の段階的な高揚と、第七日安息日に対する同時並行の段階的制限が含まれていたからである。その漸進的な歴史は、市民が日曜日の遵守を強いられ、安息日を守れば迫害されるという段階に至って完結した。これはアメリカ合衆国における日曜立法のエスカレーションの帰結でもある。日曜礼拝の強制に関わる一つの原則は「国家的背教は国家的破滅に続く」である。この原則は、黙示録13章11節の本格的な日曜法に先立って、日曜法の施行がエスカレートすればするほど神の裁きもエスカレートすることを意味する。あらゆる制定は、それに見合う破滅をもたらす。市民が安息日を守る者たちのせいだと非難している裁きは、実際には、エスカレートする日曜立法の執行によって生み出されているのである。私たちは『The Great Controversy』から一節を収録しており、私はそれに「Sunday Progression」という題を付けた。ぜひもう一度お読みいただきたい。これは「The Spirit of Prophecy」というカテゴリーにある。

神は、御自分の民が敵対と憤怒の暴風に対して立ち向かう備えができるように、終わりの日に起こることを啓示してこられた。目の前にある出来事について警告を受けた者たちは、やがて来る嵐をただ平然と待ち受け、「主は患難の日に忠実な者たちをかばってください」と自らを慰めて座しているべきではない。私たちは主を待つ者のおよであるべきで、手をこまねいた期待ではなく、揺るがない信仰をもって熱心に働くべきである。今は、取るに足りない事柄に心を奪われているときではない。人々が眠っている間に、サタンは主の民が憐れみも公正も受けられないよう、事を周到に画策している。日曜運動は今、闇の中で着々と進んでいる。指導者たちは真の争点を隠しており、この運動に加わる多くの人々も、底流がどこへ向かっているのか自分たち自身は見えていない。その主張は穏やかで見たところキリスト教的であるが、やがて語る時には竜の霊をあらわにするだろう。迫っている危険を回避するために、力の及ぶ限りのことをするのは私たちの義務である。私たちは人々の前に自分たちを正しく示して偏見を解くよう努めるべきである。私たちは真の争点を彼らの前に提示し、そうすることで良心の自由を制限する措置に対して最も効果的に抗議することができる。私たちは聖書を研究し、自分の信仰の理由を述べることができる者でなければならない。預言者は言う、「悪しき者は悪を行い、悪しき者のうち誰一人として悟らない。しかし賢い者は悟る。」 『証言』第5巻、452。

日曜法制定運動を認識するのは難しい。というのも、それは『暗やみ』の中で進んでおり、教皇権は『ひそかに、しかも疑われることなく』『自らの目的を推し進めるためにその勢力を強化している』からである。暗やみの中で日曜法を可決させるための働きが、十四万四千人の試練の過程における中心的課題であることは事実である。ダニエルとホワイ

ト姉妹によれば、『悪しき者はだれひとり悟らない』。ダニエル書の『悪しき者』とは、マタイの『愚かな乙女たち』のことであり、ホワイト姉妹は彼らをラオデキヤ人と特定している。賢い者は、たとえ私たちの周囲で展開する歴史の流れが神の言葉に矛盾しているように見えても、今起きている出来事を悟るだろう。私たちは神の言葉を信じるのか、それとも身の回りで起きていることを信じるのか。にもかかわらず、終わりはノアの日のようになる、あらかじめ警告されている。

騒乱と無神的な享樂に満ちたこの世は、眠っている。肉の安逸のうちに眠っている。人々は主の來臨を先へ先へと押しやり、警告をあざ笑う。高慢にもこう言い張る。「万事は初めから変わらず続いている」「あすもきょうのようだ。しかも、もっと豊かだ」。2ペテロ3:4、イザヤ56:12。私たちはさらに享樂にふけろう、と。しかしキリストは言われる。「見よ、わたしは盜人のように来る」。黙示録16:15。世が嘲って「その來臨の約束はどこにあるのか」と問うまさにその時、しるしは成就している。彼らが「平和だ、安全だ」と叫んでいる間に、突如の滅びが来る。あざける者、真理を退ける者が増長し、金もうけのさまざまな仕事が原則を顧みずに日常の業務として続けられ、學生が聖書以外のあらゆる知識を熱心に求めているとき、キリストは盜人のように来られる。

世界のあらゆるものが動揺している。時のしるしは不吉である。來たるべき出来事は、すでにその影を先立たせている。神の靈は地から退いており、海でも陸でも災厄に災厄が続いている。大嵐、地震、火災、洪水、あらゆる種類の殺人が起きている。誰が將來を読み取れるだろうか。安全はどこにあるのか。人間的なものにも地上的なものにも、確かな保証は何ひとつない。人々は自ら選んだ旗のもとに、急速に隊列を整えている。彼らは落ち着かずに、指導者の動向を見守りつつ待っている。私たちの主の現れを待ち望み、見張り、働いている者たちもいる。別の一群は、最初の大背教者の統率の下で隊列に加わっている。私たちには避けるべき地獄と勝ち取るべき天国があると心底信じる者は少ない。

危機はしだいに私たちにしのび寄っている。太陽は天に輝き、いつもの軌道を巡り、天はいまも神の榮光を語り告げている。人々はなお飲み食いし、植え、建て、結婚し、嫁がせている。商人たちはなお売り買いをしている。人々は互いに押し合いへし合い、最上の席を争っている。快樂を愛する者たちは、劇場、競馬、賭博場へといまだ群がっている。熱狂が支配しているが、猶予の時は急速に終わりに近づいており、すべての者の運命が永遠に決せられようとしている。サタンは自分の時が残り少ないことを知っている。彼はあらゆる手先を総動員し、人々が欺かれ、惑わされ、気を取られ、魅了されているうちに猶予の時間が終わり、あわれみの戸が永遠に閉ざされるようにしている。

世々を経て、オリーブ山で主が語られた警告のことばが、厳肅に私たちに響いてくる——「いつのまにか、あなたがたの心が放蕩と深酒とこの世の思い煩いで重くならないよう、自分自身に気をつけなさい。そうでないと、その日が不意にあなたがたに臨む。」「だから、いつも目を覚まして祈りなさい。やがて起こるこれらすべてのことから逃れ、人の子の前に立つにふさわしい者と認められるように。」 Desire of Ages, 635, 636.

イザヤ書第23章では、シドンはアメリカ合衆国、ツロは教皇制を指す。ツロとシドンは、地中海沿岸に位置した同時代の古代フェニキアの都市だった。彼らは海上交易、富、そして古代世界における影響力で知られていた。本文では、シドンとその「商人たち」がタルシシュを満たしたとされる。シドンの商人たちは「シホルの種」を交易した。それは「川の収穫」であり、「その川の実り」であり、そして「彼女の収益」である。彼女は「諸国の市場」だからである。すべての預言者は世の終わりを語っている。では、世の終わりにおける「諸国の市場」とはどの国なのか。アメリカ合衆国である。

シホルはエジプトの川（おそらくナイル川デルタ）であり、エジプトは世界を表すものとされるため、シホルは世界の富を象徴するものとして用いられている。シドンの「処女の娘」は米国の最後の世代を表しており、彼女は日曜法に伴う戒厳令と、その直後に続く国家の破滅によって圧迫される。シドンのその処女たちは、ツロに関する問いによって戒められる——「これがあなたがたの喜びの都（王国）なのか」、すなわち米国が喜んだ都なのか。「その古さは太古の昔にさかのぼる」というこの王国は、その箇所によれば大洪水の直後にニムロデによって建てられたのだが、はたしてそれがこれなのか。

神は「冠を授ける都」である「ツロ」を罰することをお定めになり、それを「御旨」とされた。教皇制への罰には世界の金融構造の崩壊が含まれる。というのも、「主は」「商業の都」である「シドン」（アメリカ合衆国）に対する「戒めをお与えになった」からである。その「堅固なとりでを滅ぼす」、すなわちアメリカ合衆国の経済を指すその御命令は、安息日の戒めである。国の背教には国の破滅が続くからである。

教皇制に対する罰は、アメリカ合衆国の経済が破壊されることに呼応して、全世界の経済が崩壊することから始まる。シドンにはその経済に結び付いた「家」があり、したがって、それは、もはやそこに入ることができないことからわかるように、破壊された金融構造を象徴している。その「家」からの投資も利益も、もはやない。破壊されたからである。破壊が起こるのは日曜法の時であるが、日曜法以前にも裁きはすでに激化している。崩壊が襲うとき、教皇制、商人の君たちと名だたる交易者を従えるアメリカ合衆国、そしてタルシシュの船は「嘆き叫ぶ」ことになる。

この箇所における「タルシシュ」という場所は古代の富と結び付けられており、聖書におけるタルシシュの船は経済力の第一の象徴である。

王の船はフラムの家臣たちとともにタルシシュへ行き、三年に一度、タルシシュの船が金、銀、象牙、猿、孔雀を運んで来た。ソロモン王は富と知恵において地のすべての王たちにまさっていた。歴代誌下 9:21、22。

船は経済力を象徴しており、聖書の預言ではタルシシュが経済を担う主要な船として描かれている。タルシシュの「娘」と表されるタルシシュの最後の世代には、「川のようにあなたの地を通り過ぎよ」と告げられ、彼女が見いだすのは、自分の地には「もはや力がない」ということであり、もはやツロの王国を「喜ぶ」こともできない、ということである。彼らが求めていた力とは、かつてのシドンの経済力であったが、それは失われていた。というのも、海がこう語ったからである—「私は産みの苦しみをせず、子を産まず、若者を養わず、おとめを育てない」。こうして、海、すなわち世界の人々が世界経済の崩壊を嘆く最終世代が示され、その時、人々は自分たちが地球の歴史の最後の世代であ

るという現実を目を覚ますが、もはや永遠のいのちの備えをするには遅すぎるのである。

「人間の感覚に永遠の光景の現実が開かれるとき、金銭の価値はまもなく一挙に下落するだろう。」『Evangelism』62ページ。

この箇所には、すべての者に苦痛をもたらす「報告」あるいはメッセージが二つある。第一の「報告」はエジプトに関するもので、第二の「報告」はツロである。イザヤが「エジプトに関する報告のときのように」と言っているので、エジプトの報告は過去形であり、神がシドン（アメリカ合衆国）を滅ぼされる前にエジプトに対して何かをなされたことを示している。神がエジプトに対してなされたこと、すなわちそれがエジプトの「報告」をも表しているのだが、それは、神が選ばれた民と初めて契約を結ばれたことと関連して、エジプトを滅ぼされたということである。二つの報告は同じ「報告」である。エジプトの報告が始まりであり、ツロの報告が終わりである。アルファとオメガは、その主題の初めの歴史をもって、終わりの日における十四万四千との契約を示しておられる。エジプトに関する「報告」とは、ファラオとその軍勢が滅ぼされた紅海での解放のことであり、それは、「報告」である「ツロの重荷」によって表されているように、神の民の最終的な解放を型どっている。

聖書においてタルシシュの船を滅ぼすものとして表されている勢力はイスラム教である。イスラム教の主題は後で取り上げるので、この問題については後ほどより詳しく扱う。この箇所ではそれは「Chittim」（キプロスを指す古い語）として表されており、その箇所はシドンとティルス破壊が「Chittim」から明らかにされると述べている。イスラム教の象徴には、聖書の預言におけるアメリカ合衆国の破壊に関する非常に具体的な描写が含まれている。

イザヤ書で言及される日や年を追うことは重要である。というのも、それらはしばしば、その後続く箇所の預言上の時期を示しているからである。イザヤ書23章は、22章の「幻の谷の重荷」に続いており、その前には三つの重荷を含む21章がある。そしてその三つはいずれもイスラム教を指している。その前の章では、20章1節において、続く諸章で示される滅びの預言が同定される預言史の舞台設定がなされている。

タルタンがアシュドドに来た年（アッシリアの王サルゴンが彼を遣わしたとき）、アシュドドと戦い、これを攻め取った。イザヤ書 20:1。

「タルタン」という語は固有名詞かもしれないが、おそらく軍司令官の称号である。アッシリア人が次第に世界の支配を掌握していった時代、タルタンはエジプトの都市アシュドドに来て、それを占領した。アッシリアはバビロンを象徴していた。アッシリアもバビロンも北から来る王国で、神の羊を「散らした」とされる「獅子」として見なされ、どちらも同じ罰を受ける。アッシリアが最初で、バビロンが最後だった。

イスラエルは散らされた羊である。獅子たちが彼を追い散らした。まずアッシリアの王が彼を食い尽くし、最後にこのバビロンの王ネブカドネザルが彼の骨を砕いた。それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。見よ、わたしはアッシリアの王を罰したように、バビロンの王とその地を罰する。エレミヤ書 50:17、18。

預言的には、両者とも「傲慢なアッシリア人」である。

尊大なアッシリア人セナケリブが、神をなじり冒瀆し、イスラエルを滅ぼすと脅したとき、「その夜のうちに、主の使いが出て行き、アッシリア人の陣営で十八万五千人を打った」。セナケリブの軍からは、「すべての勇士、指導者、隊長がことごとく断たれた」。そして「彼は恥を負って自分の国に帰った」。〔列王記下 19:35; 歴代誌下 32:21〕 大争闘、512.

「タルタンがアシュドデに来て」「それを取った」年は、ダニエル書十一章の最後の六節に描かれているように、教皇権による世界の段階的征服を表している。調査審判の「終わりの日々」であり、直接に執行審判（最後の七つの災い）へとつながる日曜法危機の歴史こそが、タルタンがアシュドデに来た「年」によって表されている歴史的背景である。その歴史の文脈を据えたうえで、イザヤはイスラムに関する三つの破滅の預言、ラオデキヤ的アドベンチズムに関する一つの預言、そしてツロに対する託宣を示す。第二十四章は最後の七つの災いの典型的な一例であり、それに続く第二十五章は神の民の最終的な救出を表しており、そこで私たちは大艱難の時に神の民が述べる最もよく知られた言葉の一つを見いだす。

その日にはこう言われるだろう。「見よ、これが私たちの神だ。私たちは彼を待ち望み、彼は私たちを救ってくださる。これが主である。私たちは彼を待ち望んだ。その救いを喜び、歓喜しよう。」イザヤ書 25章9節。

十四万四千人は、十人の乙女のたとえのとおり主が遅れて来られたとしても、彼らの主が婚宴に来られるのを待っていた賢い乙女たちである。彼らはラオデキヤ人ではなく、フィラデルフィア人である。ここまでで、この記事は文脈を設定してきた。

1798年、ナポレオンはローマ教皇を捕らえ、黙示録13章によれば世の終わりに癒されるとされる預言上の致命的な傷を負わせた。その時点で、アメリカ合衆国は、ダニエル書2章・7章・8章・11章および黙示録12章・13章・16章・17章・18章によれば、聖書預言における第六の王国としての地位を占めた。その時以降、合衆国の共和主義の角とプロテスタントの角（アドベンチズム）は、教皇制が何者であるかを忘れてしまっている。1798年は、世界の他の諸国がアメリカ合衆国を主権国家として承認した最初の年であり、また、第一の天使のメッセージが歴史上到来した年でもある。

当時のプロテスタントの「標語」は「聖書、ただ聖書のみ」であった。プロテスタントは自らを、聖書のみを擁護する者として自認している。そして第二の天使が到来したとき、アドベンティズムがその衣鉢を継ぎ、その「標語」を受け入れ、その後「聖書の民」と呼ばれるようになった。彼らはウィリアム・ミラーの働きを通して、正しく用いれば聞こうと願うすべての人の心に聖書を開くことのできる一連の規則を与えられていた。「ミラーの預言解釈の規則」は、第三天使のメッセージを伝えるためにはそれを学ばなければならないと靈感が教えている。

キリストは言われた。「だれでもわたしについて来ようとする者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。」さらに彼は言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は、闇の中を歩むことはない。」真理の光は燃える灯火のように広がっており、光を愛する者たちは闇の中を歩むことはない。彼らは聖書を学び、彼らが聞いているのが見知らぬ者の声ではなく、まことの羊飼いの声であることを、

確かに知るためである。

第三の天使のメッセージを宣べ伝える働きに従事している人々は、ミラー師が採用したのと同じ方法で聖書を研究している。『預言と預言年代に関する見解』と題する小冊子の中で、ミラー師は、聖書の研究と解釈のための、次のような簡明だが賢明で重要な規則を示している。

1. 聖書に示された主題に関して、すべての言葉は適切な関係と重みを持っていなければならない。 2.

聖書のすべては必要であり、熱心な取り組みと学びによって理解できる。 3. 揺るがずに信仰をもって求める者からは、聖書に啓示されたものは何一つ隠され得ないし、隠されることもない。 4. 教義を理解するには、知りたい主題に関する聖句をすべて集め、一つ一つの言葉に本来の重みを持たせなさい。そして、矛盾なく自分の理論を形づくれるなら、誤っているはずがない。 5. 聖書はそれ自体が規範である以上、聖書自身が自らの解釈者でなければならない。もし私が教師に頼って解き明かしてもらい、その人が意味を当て推量したり、自派の教義に合わせるため、あるいは賢いと思われるためにそのように解釈したりするなら、その推量や欲求、教義、あるいは知恵こそが私の規範となり、もはや聖書ではなくなる。

上記はこれらの規則の一部であり、聖書研究にあたっては、示された原則を私たち皆が心に留めるのがよい。

真の信仰は聖書に基づいている。だがサタンは、聖書をねじ曲げて誤りを持ち込むためにあらゆる策を用いるので、聖書が実際に何を教えているのかを知ろうとする者には細心の注意が必要である。感情に過度にとらわれ、しかも神の言葉がはっきり語っていることが感情と一致しないからといってそれを無視しつつ、自分は誠実だと主張することは、この時代の大きな迷妄の一つである。多くの人には、感情以外に信仰の土台がない。彼らの宗教は興奮から成り立っており、それがやむと、信仰は失われる。感情はもみ殻かもしれないが、神の言葉は麦である。そして預言者は言う、「もみ殻が麦に対して何になるうか」。

彼らが持ったこともなく、得ることもできなかつた光と知識に心を留めなかつたからといって、だれ一人として罪に定められることはない。しかし多くの者は、世の基準に迎合したいがために、キリストの使節たちによって彼らに示される真理に従うことを拒む。そして、彼らの理解に届いた真理、魂に輝いた光が、裁きにおいて彼らを罪に定めるのである。この終わりの時代に、私たちはあらゆる時代を通して輝いてきた光の積み重ねを与えられており、それに相応して責任を問われることになる。聖さの道は世と同じ水準にあるのではない。それは高く築き上げられた道である。もし私たちがこの道を歩み、主の戒めの道を走るなら、「義人の道は輝く光のようで、完全な日となるまでますます輝きを増していく」ことを知るであろう。Review and Herald, 1884年11月25日。

「預言の鍵」カテゴリ内の「ウィリアム・ミラー」というタイトルの記事で、ウィリアム・ミラーの規則についてより詳しく読むことができます。

聖書を学ぶにあたっては、私たち皆が、“Father Miller”の預言解釈の規則の中に示された原則を心に留めるのがよい。プロテスタントの角には、私たちが聖書と呼ぶ聖なる文

書が与えられ、そこに含まれる原則を守り広める責任も与えられ、さらに、その聖なる文書の意味と意図を正しく見極めるための一連の規則も与えられた。

共和主義の角には、私たちが「憲法」と呼ぶ神聖な文書が与えられ、そこに含まれる原則を擁護し促進する責務も与えられた。共和主義の角にはまた、神聖な文書の意味と意図を正しく解釈するための一連の規則も与えられた。憲法を正しく解釈するために与えられたその規則は権利章典であり、権利章典の最初の規則に憲法の最も重要な目的が刻まれている。権利章典に掲げられた第一修正は、宗教の自由、表現の自由、言論の自由、および報道の自由である。

連邦議会は、国教の樹立に関する法律を制定してはならず、また宗教の自由な行使を禁止してはならない。言論の自由または出版の自由、または人民が平穩に集会する権利および政府に対して苦情の救済を請願する権利を侵してはならない。合衆国憲法修正第1条

日曜法は、宗教の自由を保障する憲法の第一の条項に対する公然たる攻撃であり、日曜法によってそれが廃されることで、憲法の終わり、聖書の預言における第六の王国としてのアメリカ合衆国の終わり、そしてその時大声の叫びで第三天使のメッセージを宣べ伝えている者たちに対する迫害の始まりが示される。第三天使の大声の叫びを宣べ、第一修正条項と憲法の破壊に抗議している者たちは、本来、守るべく任命された聖なる文書を擁護する聖なる規則を堅持し適用すべきはずの人々によって迫害される。これは、小羊のような地の獣の二本の角の並行する歴史を理解し適用することの一つの例証である。合衆国憲法の制定者たちはミラー師に対応している。ミラーに用いられるFatherという呼称は、カトリックの司祭ではなく、指導者を指し示すために用いられている。聖書は、霊的な導き手であることを名乗る人々を「父」と呼ぶことを禁じている。ミラー派は、しばしばあるように、その父の名にちなんで呼ばれている。この区別を見落とすことは、エリヤのメッセージが、父の心の子へ、またその逆に向ける時に意味するところの一部を見落とすことになる。

イザヤ書二十三章においてアメリカ合衆国は聖書の預言における第六の王国であり、迫り来る日曜法の時にその憲法を覆すまで、その地位は変わらない。第六の王国は預言上の七十年、すなわち「一人の王の日々」のあいだ支配する。七十年のあいだ支配した王国（王とは王国を指す）はバビロンであった。その七十年の間、国家の角はバビロンの政府であり、教会の角はカルデヤ人であった。ダニエル、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは十四万四千人を表している。ダニエルの証しには、両方の角と神の民がともに表されている。バビロンでの七十年の捕囚は、イザヤが「一人の王の日々」として用いて、アメリカ合衆国の預言的歴史とアドベンチズムの歴史が1798年から日曜法に至るまでであることを示している。

アメリカ合衆国の二本の角それぞれに関する預言的歴史の系譜を見定めることによって、終わりと始まりを考察できるようになり、二本の角という証人によって互いの角の特性を識別できる。結局のところ、角はすべて同じであった。ダニエル書には角があり、折れた角もあれば、その折れた角から生え出た角もあった。ダニエル書のいくつかの角は互いに同じ大きさではなく、他の角よりも遅れて現れたものもあった。しかし、アメリカ合

衆国の二本の角はそうではない。これら二本の角は、目的においては互いに異なるが、同じ歴史を通して互いに並行し、同じ道標を生み出す。また、その歴史には理解するうえで重要な留意点もある。

アドベンティズムの始まりにおいては、フィラデルフィアの教会に象徴される預言的歴史からラオデキアの教会へと変化が起こった。したがって、終わりにおいても、ラオデキアの預言的歴史からの転換がなければならない。イエス・キリストの黙示はこの理解の光を含んでおり、今この時に封印が解かれつつある事柄の一部である。

そして「七十年が終わった後」、教皇は「歌う」だろうし、「忘れられた」「娼婦」は思い出されるだろう。彼女が「思い出される」のは日曜法においてであり、そこでの争点は、太陽の礼拝か、あるいは神の律法が人類に「覚えよ」と告げたその日の礼拝かである。

本稿では、バビロンの七十年支配の歴史が、1798年から日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の歴史を予表していることを明らかにしました。先の記事でも、またしばしば『ハバククの表』においても、エジプトでの捕囚とエジプトからの解放が、アメリカ合衆国と神の民の歴史をも予表していると示してきました。バビロン、エジプト、アドベンチズム、そしてアメリカ合衆国という四つの歴史は、これらのラインに重ね合わせられる唯一のものではありませんが、これら四つのラインに初出の法則を適用すると、まったく驚くべきものです。この記事の締めくくりとして、私の意図するところを示す簡単で部分的な一例を挙げます。これは、後日イザヤ書二十三章の歴史をさらに扱う際に続けて論じていくつもりの内容でもあります。

バビロンの歴史には、初めに回心した王がおり、終わりには邪悪な王がいる。バイデンであれトランプであれ、関係ない。というのも、ダニエル書は支配者を立て、退けるのは神であると教えているからだ。日曜法令の時、民主党の指導者であれ共和党の指導者であれ、確かなのは、その指導者が悪しき指導者だということだ。ネブカドネツアルはバビロンそのものであり、バビロンの暴君で、三人の正しい者たちを火の炉に投げ込むことさえいとわなかった。しかし、彼はついには回心してダニエルの神を信じるようになった。最後の指導者であるベルシャツアルはそうではなかった。彼は悪しき王であった。予言におけるアメリカ合衆国は子羊として始まる。子羊はキリストと、彼の人類のための犠牲の象徴である。終わりにはアメリカ合衆国は竜のように語るようになる。この歴史の筋におけるキリストからサタンへの変化は、ネブカドネツアルとベルシャツアルの違いによって表されている。

ベルシャツアルには、神のみ旨を知りそれを行うための多くの機会が与えられていた。彼は、祖父ネブカドネツアルが人間の社会から追放されるのを見た。彼は、誇り高い君主が誇っていた知性が、それをお与えになった方によって取り去られるのを見た。彼は、王が王国から追われ、野の獣の仲間とされたのを見た。しかし、ベルシャツアルの娯楽と自己誇示への愛は、決して忘れてはならない教訓を消し去り、彼はネブカドネツアルに顕著な裁きを招いたのと同様の罪を犯した。彼は、恵みとして授けられた機会を無駄にし、真理を知るために手の届くところにある機会を用いることを怠った。「救われるために私は何をしなければならないのか？」という問いを、その偉大ではあったが愚かな王は無関心に聞き流した。バイブル・エコー、1898年4月25日。

邪悪なベルシャザルは愚かな王であったことに注意しなさい。彼は父ネブカドネザルと同じ裁きを受けた。というのも、どちらの裁きもレビ記26章の「七たび」として表されているからである。ネブカドネザルは二千五百二十日のあいだ、野にあって獣のように生きた。これは聖書的な七年であり、壁に書かれていた彼の子ベルシャザルへの裁きもまた二千五百二十を表している。違いは、ネブカドネザルに対する裁きは彼を回心させて賢明な王にしたのに対し、ベルシャザルに対する裁きは愚かな王に下ったという点である。

バビロンの最後の支配者には、その最初の支配者における型と同様に、神の見張りの者の宣告が下った。「王よ、……あなたに告げられる。あなたの国はあなたから取り去られた。」ダニエル書 4:31. 預言者と王、533.

最後の大統領にとっての「壁に書かれた文字」とは、政教分離の「壁」を明確に示している合衆国憲法修正第1条のことであり、その最後の愚かな王はそれを理解していない。レビ記26章の「七つの時」は、日曜法において北の王によってもたらされる「人々の離散」を表している。その離散こそ、日曜法に続いて起こる国家的破滅である。第六の国は、腐敗した教会からだけでなく、腐敗した女が関係を持った暴虐なヨーロッパの王たちからも守るために憲法を起草した建国の父祖たちの教訓を忘れてしまった。建国の父たちは、教皇制とヨーロッパの王たちを退けた者たちを代表している。というのも、彼らは、教皇制の暗黒の一千二百六十年という離散の時代から抜け出たのちの自らの経験から、その種の専制に対する防護こそが新しい憲法の中核でなければならないことを知っていたからである。彼らは賢い父たちであり、子羊のようであった。しかし最後の父はそうではない。彼は竜のように語る。父たちは離散から出て来たが、子は再び離散に戻っていく。いずれの場合においても、暴君は最初の教皇制であり、また最後の教皇制である。

最初の王ネブカドネザルと最後の王ベルシャツアルへの裁きの象徴は、レビ記二十六章の「七つの時」による離散であった。ネブカドネザルはそれを生き、ベルシャツアルは自らが死んだまさにその夜、それが彼の墓碑銘として壁に記された。初めにおける共和政の角の象徴は北の王の束縛からの脱出であり、終わりにおける共和政の角の象徴は北の王によってもたらされる捕囚である。日曜法は、聖書の預言における第六の王国としてそれが死ぬ「まさにその夜」である。四つの例、すなわちベルシャツアル、ネブカドネザル、そして共和政の角の始まりと終わりにおいて、レビ記二十六章の「2520」が、初めと終わりに示される象徴である。それはアルファとオメガの署名を表している。

ウィリアム・ミラーが最初に見いだした「時の預言」は、レビ記26章の2520であった。それは、ミラーの働きを通してイエスが据えられた土台の第一の石であった。また、それは1863年にアドベンチズムによって退けられた最初の基礎的真理でもあった。ミラーの真理の石がすべて土台に据えられたとき、それらの真理はハバククのもの、すなわち1843年と1850年の先駆者図表に表された。これら二つの板は、ちょうど十戒の二枚の石の板が古代イスラエルとの契約を表していたのと同様に、神とその名づけられた民との契約関係を表している。

ラオデキア的なアドベンチズムが、日曜法の時に主の口から吐き出されるその終わりに、壁に書かれた文字とは、あの二つの聖なる開拓者の図表である。彼らは自分たちの歴史の初めに与えられた警告のメッセージによって益を受けることを拒んだため、それらを

読み解くことができないのだ…….

米国における1837年の金融危機は、経済的要因、政策、そして投機的な活動が組み合わさって引き起こされた複雑な出来事だった。

投機バブル：1837年に至る数年間、国の西方への拡大に一部後押しされ、土地と投資における投機ブームが起きた。土地投機は、特に西部フロンティアで、地価の高騰と過剰な借入を招いた。

容易な与信と投機的融資：銀行や金融機関は、しばしば十分な担保も取らずに、巨額の与信や貸出を行っていた。このような与信への容易なアクセスは投機熱を助長し、金融の不安定化リスクを高めた。

銀行の過剰拡大：銀行は業務を急速に拡大し、しばしば、裏付けとなる正貨（金と銀）以上の紙幣（銀行券）を発行していた。この慣行は「ワイルドキャット・バンキング」と呼ばれ、規制の及ばない信頼性に乏しい通貨が過剰に流通する結果を招いた。

ジャクソンの経済政策：大統領アンドリュー・ジャクソンの政策は、危機を悪化させる一因となった。彼は1836年に「正貨通達」を発し、公有地の購入代金は紙幣ではなく金銀の正貨で支払うことを義務づけた。これにより、銀行券を正貨に兌換しようとする動きが殺到し、金融の逼迫と銀行の破綻を招いた。

国際的要因：米国の危機は、国際的な経済情勢の影響も受けた。米国の主要な貿易相手国である英国経済の低迷により、米国製品および輸出の需要が減少した。その結果、米国の企業に影響が及び、経済的苦境を招く一因となった。

恐慌と取り付け騒ぎ：1837年5月、銀行の破綻や信用収縮を含む一連の金融ショックにより、投資家や預金者の間でパニックが生じた。このパニックは取り付け騒ぎの連鎖と深刻な信用収縮を引き起こした。

マネーサプライの縮小：銀行が相次いで破綻し、信用が引き締まるにつれて、経済全体のマネーサプライは大幅に縮小した。このマネーサプライの縮小は経済的困難を悪化させ、不況を一段と深めた。これらの要因の組み合わせにより、銀行の破綻、失業、消費者支出の減少、そして全般的な経済の沈滞を特徴とする深刻な景気後退がもたらされた。

将来を恐れる理由は何もない。ただし、主がこれまで私たちを導いてこられた道と、過去の歴史における主の教えを忘れてしまうときは別である。『Life Sketches』 196頁